

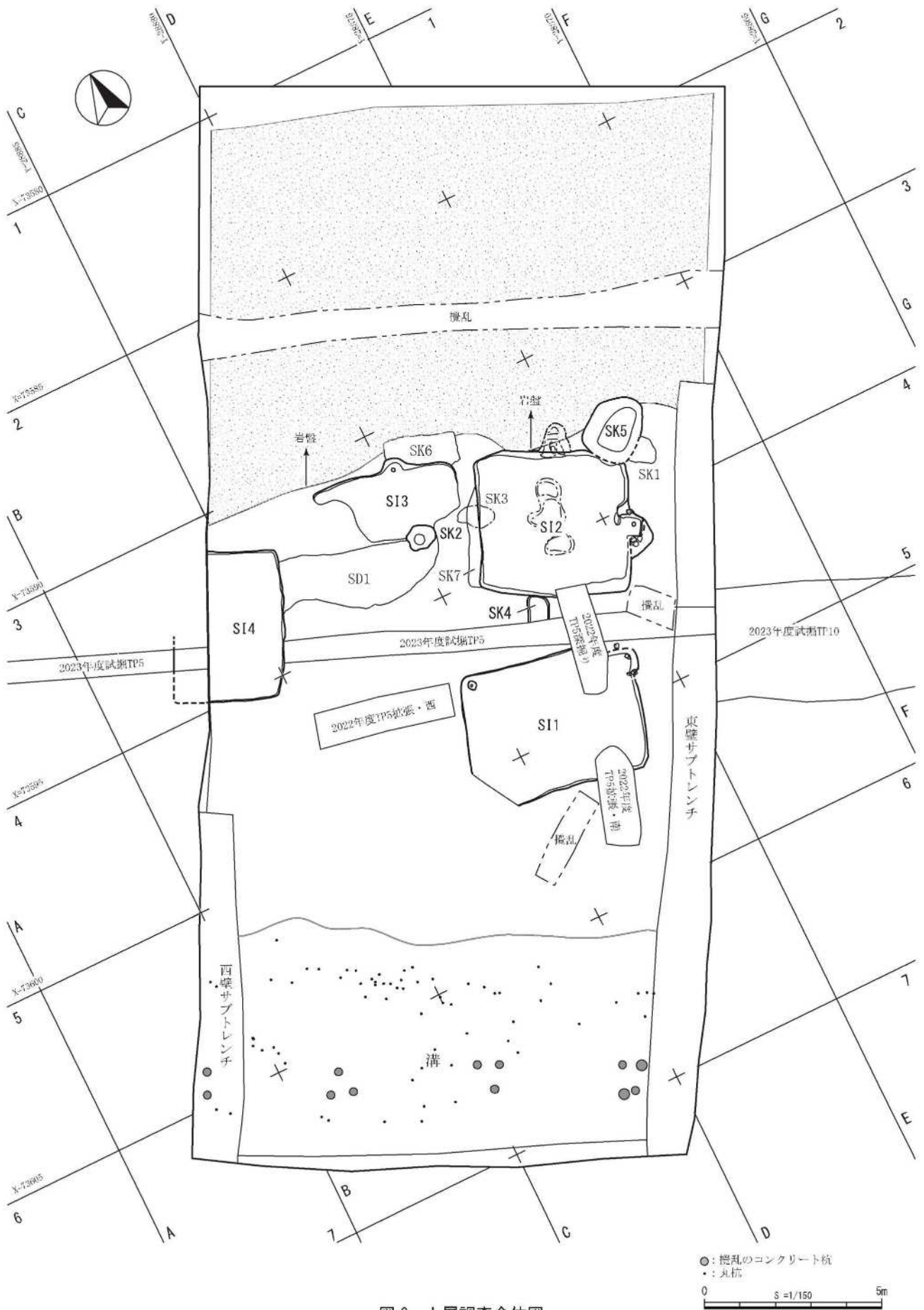
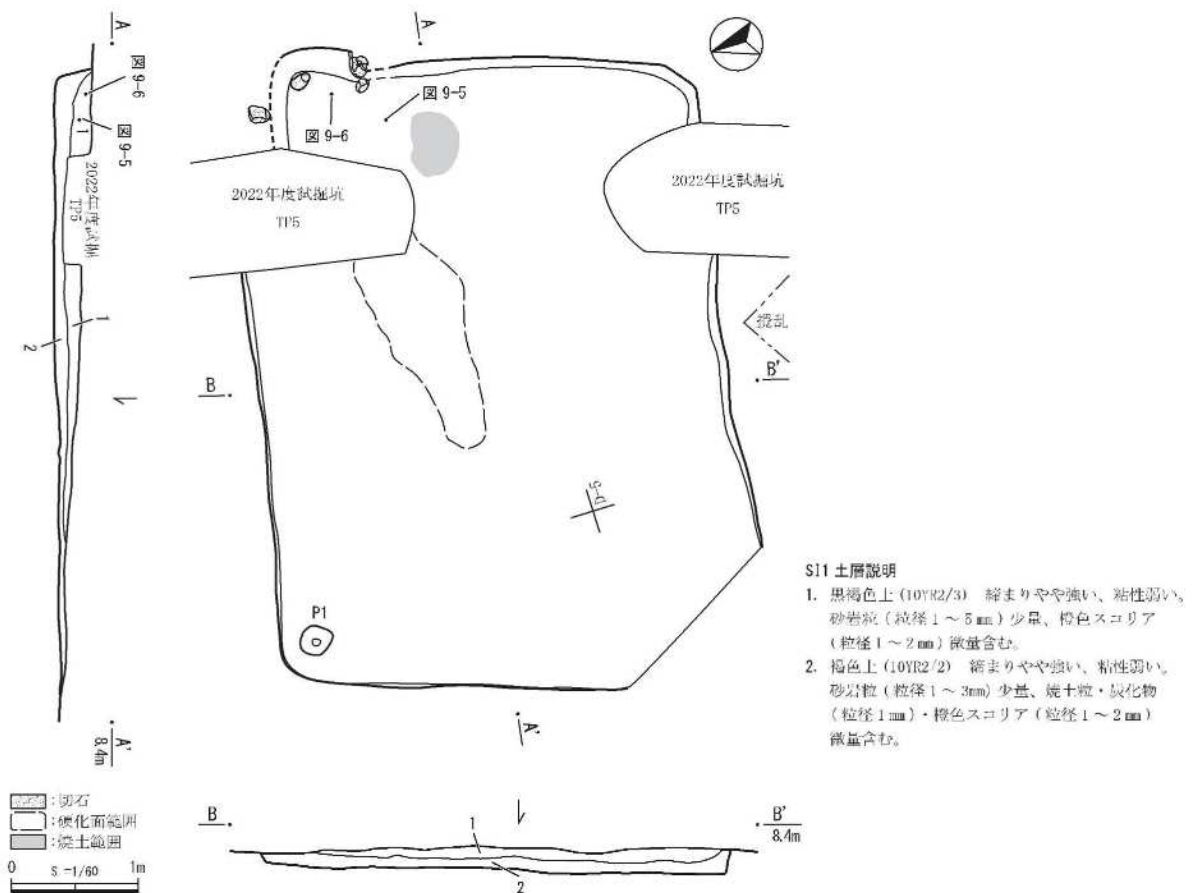
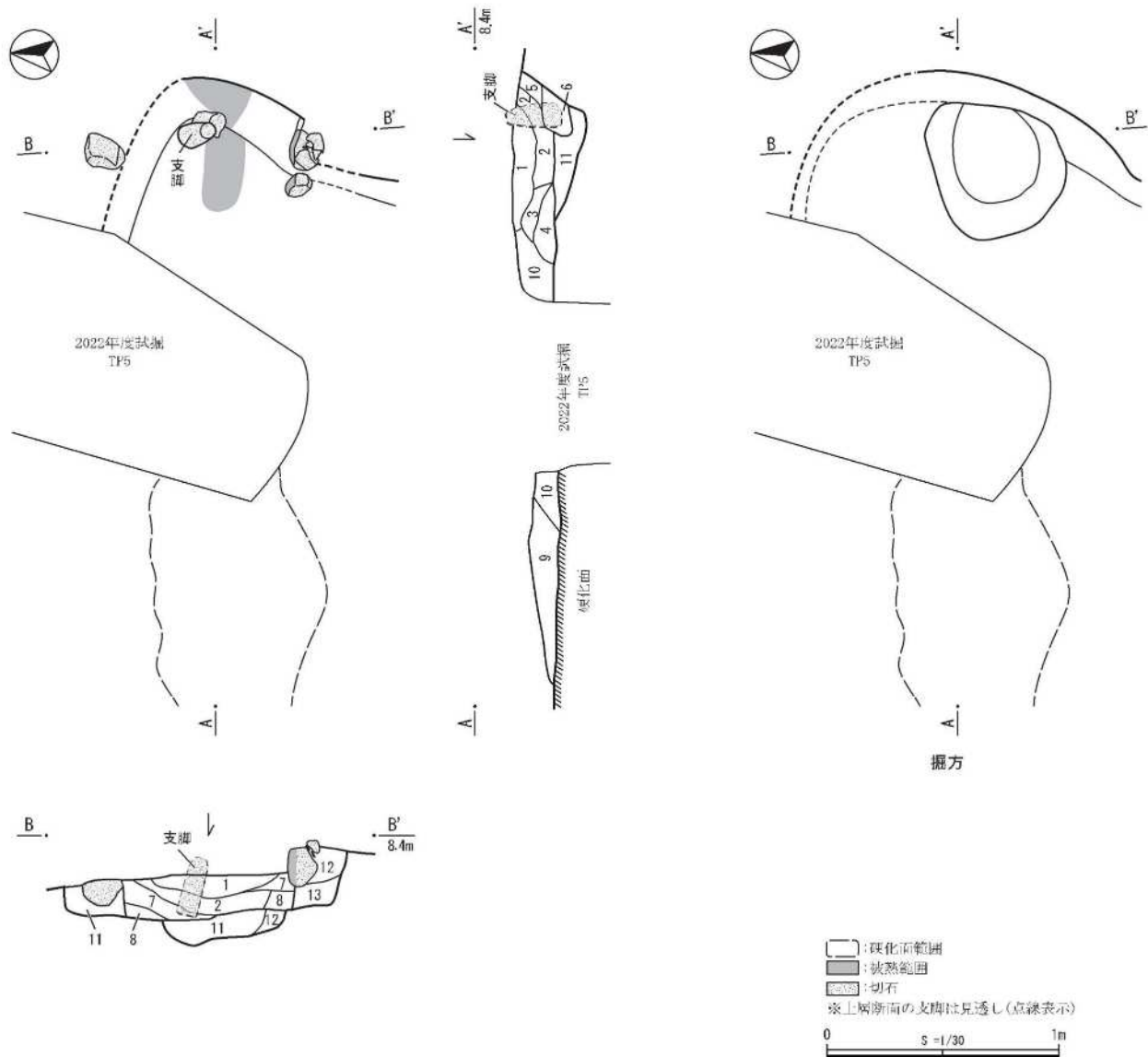


図6 上層調査全体図

削りが観察され、2は底部中央が内面側に突出する。1～3・5は削りの後の横撫でが強くつけられている。6は須恵器
 坏で、底部は右回転糸切痕を残す。7は、凝灰岩製の砥石である。良く使い込まれていて、正面は左側縁に向けて薄くなっ
 ている。支脚は写真のみ掲載した。図版16-1-写4がそれであるが、砂岩製の切石である（長さ260mm、幅100mm、厚さ
 85mm）。上端は平らで、側面は7面に面取りされている（面取りの幅は不均等）。上半は被熱のために白色化しており、
 上端は赤化している。これらの遺物の年代は、須恵器坏の底径口径比（1:2）、ロクロ土師器坏（相模型坏）の器形から、
 9世紀後半と推定される。

遺構の時期 出土遺物（土師器、須恵器）の様相から9世紀後半に廃棄されたと推定する。





SI1 竈 土層説明

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～15mm)・焼土粒(粒径1～5mm)少量、炭化物(粒径1mm)微量含む。
2. 明赤褐色土 (5YR5/6) 締まり中位、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～2mm)少量、炭化物(粒径1mm)微量含む。焼土主体土。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～15mm)・焼土粒(粒径1～15mm)多量含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性あり。砂岩粒(粒径1mm)微量、焼土粒(粒径1～10mm)少量、炭化物(粒径1mm)微量含む。
5. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～20mm)少量、焼土粒(粒径1～30mm)多量、炭化物(粒径1～10mm)少量含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まり・粘性あり。砂岩粒(粒径1～10mm)少量、炭土粒(粒径1mm)微量含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～5mm)少量、焼土粒・炭化物(粒径1mm)微量含む。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まり・粘性あり。砂岩粒・焼土粒(粒径1mm)少量含む。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～2mm)少量、焼土粒・炭化物(粒径1～2mm)微量含む。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1mm)少量、焼土粒(粒径1～3mm)中量、炭化物(粒径1～10mm)少量含む。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～5mm)少量、焼土粒・炭化物(粒径1mm)微量含む。掘方覆土。
12. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり・粘性あり。砂岩粒(粒径1～3mm)少量、焼土粒(粒径1～3mm)・炭化物(粒径1mm)・砂岩BL(粒径30mm)微量含む。掘方覆土。
13. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり、粘性強い。砂岩粒(粒径1mm)・焼土粒(粒径1mm)少量、炭化物(粒径1mm)微量含む。掘方覆土。

図8 SI1 竈

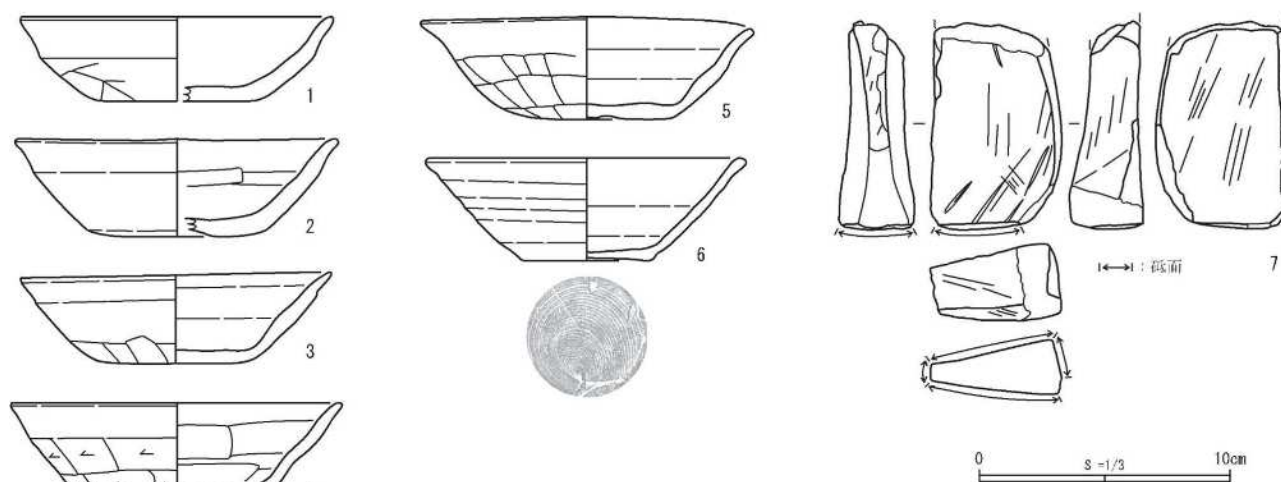


図9 SI1出土遺物

表2 SI1 土器観察表

寸法欄：復は復元値を表す。

番号	材質・器種 出土場所	寸法 (cm)	器形・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図9-1	土師器 外 段上	口径：復12.4 底径：復 6.6 器高： 3.4	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。調整：外面底部一定方向の益削り、外面体部下半は横位の削り、内面～外面口縁部横撫で。／残存：1/4。	小礫 良 にぶい黄褐色10YR7/4	
図9-2	土師器 外 底	口径：復12.1 底径：復 7.0 器高： 3.9	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。調整：外面底部～体部下半撫で、外面底部中央は窪む、内面～外面口縁部横撫で。／残存：1/3。	小礫 良 にぶい褐色7.5YR7/4	被熱
図9-3	土師器 外 段上	口径： 12.4 底径： 6.2 器高： 3.7	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。調整：外面底部～体部下半撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：1/2。	小礫 良 褐色7.5YR7/6	
図9-4	土師器 外 段上	口径： 13.1 底径： 6.8 器高： 4.2	器形：底部～口縁部は開きながら立ち上がる。調整：外面底部～体部下半は撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：ほぼ完形。	赤色粒、小礫 良 にぶい褐色7.5YR7/4	
図9-5	土師器 外 底	口径： 13.2 底径： 5.8 器高： 4.1	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。調整：外面底部一定方向の益削り、外面体部下半は横位の削り、内面～外面口縁部横撫で。／残存：2/3。	小礫 良 灰黄褐色10YR4/2	
図9-6	須恵器 外 底	口径： 12.7 底径： 5.0 器高： 4.1	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／成形：ロクロ、底部回転糸切(右)。調整：外面体部下半ロクロ撫での後、内面～外面口縁部横撫で。／残存：1/2。	小礫 良好 灰灰色2.5Y6/1	

表3 SI1 石製品観察表

寸法欄：残は残存値を表す。

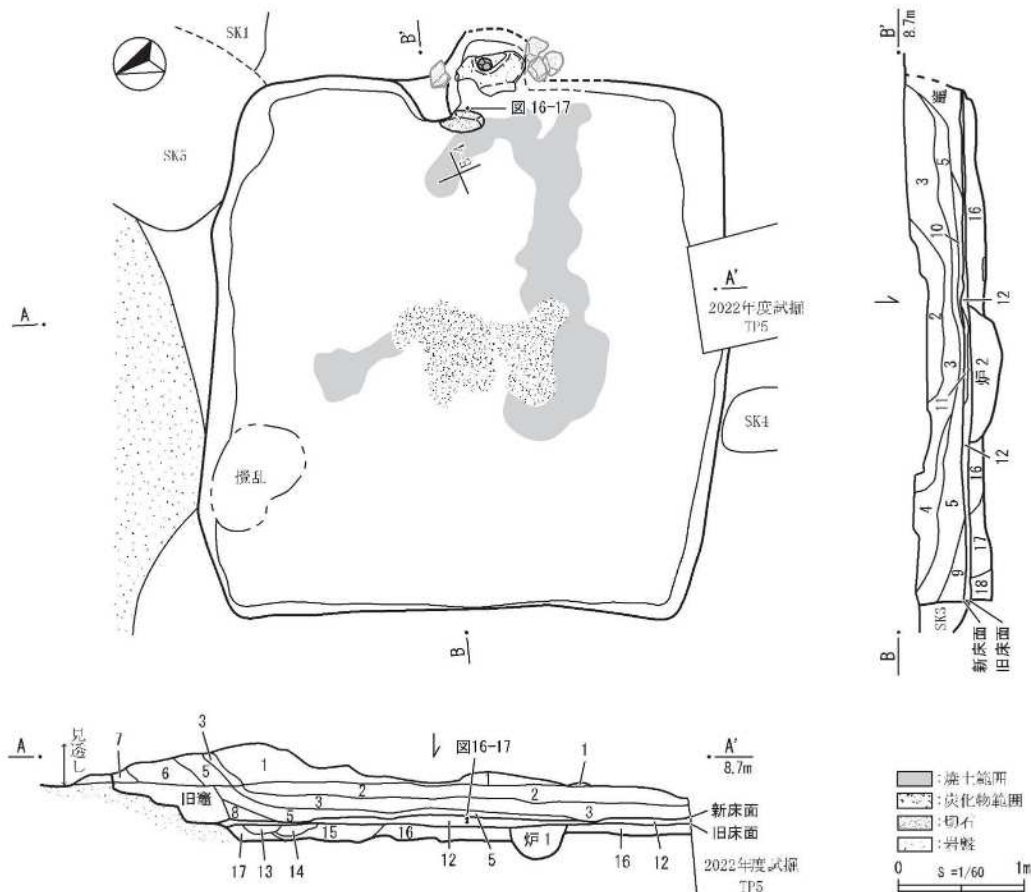
番号	器種 出土場所	寸法 (cm)・重量 (g)				特徴・使用痕	石質	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
図9-7	砥石 段上	残8.2	残5.2	残3.0	残132	形状は左側縁に向けて刃味を減じる断面楔形。砥面は正面、右側縁、裏面、左側縁、下側縁の5面。右下方は欠損した後も使用しており、この部分は曲線を描く。上端は欠損。	凝灰岩	

SI2

位置・切合い 調査区東壁近くのD・E-3・4区に位置する。SK5に切られ、SK3・SK7を切る。

形態・規模 平面形は方形を呈し、東側に竈を有する。本遺構は床面と竈が新・旧2時期ある。以下では、新床面（最後の使用面）は、基本的には「床面」「竈」と呼称し（但し必要な場合は「新床面」「新竈」）、古い床面と竈は「旧床面」「旧竈」とした。新・旧床面共に、周溝・柱穴は無かったが、旧床面には付帯施設として、炉が2基検出された（炉1、炉2）。新旧床面は、平面形は当初のままで、旧床面に盛土して新床面を構築し、竈はその際に北壁から東壁へ付け替えられている。規模は、東西4.35m、南北4.10m、深さ0.60m（旧床面までは0.65m）を測る。主軸方向はN-65°-W、旧床面の主軸方向はN-30°-Eである。新床面は僅かな凹凸はあるが、ほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、新床面には竈前面から中央部まで焼土粒が多く分布する範囲がみられ、中央部には炭化物粒の分布が確認された。

竈 東壁の中央に位置する。東壁を平面形では半円形に掘り込み、支脚（砂岩の切石）をその中央に据えている。支脚は竈底面に岩盤と同質の石があったために、支脚を設置する部分を穿って立てられている（巻頭1-1）。支脚を中心に

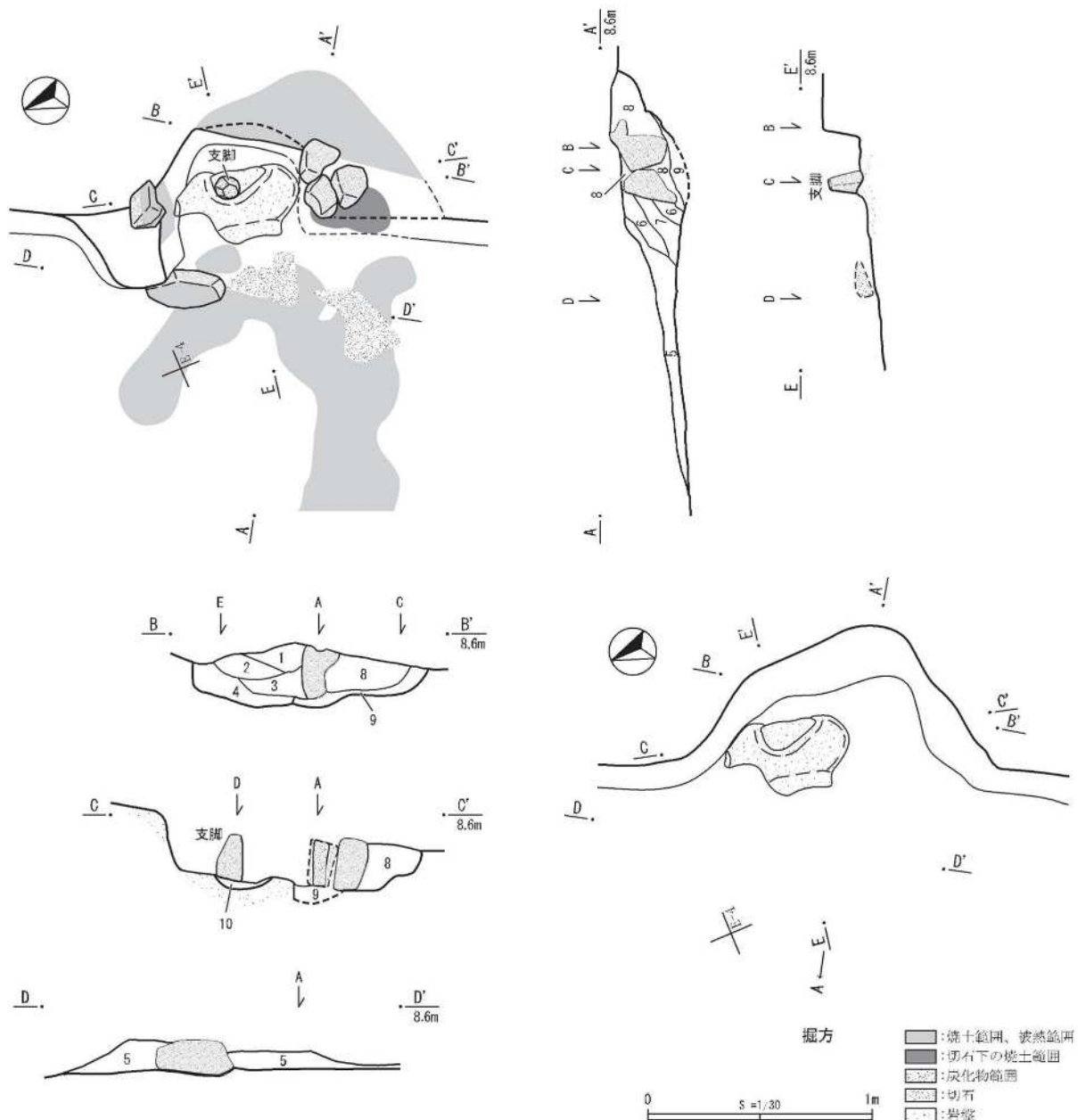


S12 土層説明

1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1～3mm) 中量、焼土粒 (粒径1～10mm)・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1～3mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量、炭 (粒径5mm) 微量含む。
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まりあり、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1～3mm) 少量、焼土粒 (粒径1～3mm) 微量、炭化物 (粒径1～10mm) 少量含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1～2mm) 少量、焼土粒 (粒径1～10mm)・炭化物 (粒径5mm) 微量含む。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1～3mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1～3mm) 中量、焼土粒 (粒径1mm) 微量、砂岩 BL (粒径50～100mm) 少量含む。
7. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 締まりあり、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1mm) 少量、焼土粒 (粒径1～30mm) 多量含む。
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 締まり・粘性あり。砂岩粒 (粒径1mm) 微量、焼土粒 (粒径1mm) 中量、炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まり・粘性あり。砂岩粒 (粒径1～3mm) 少量、炭化物 (粒径3mm) 微量含む。
10. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1mm) 少量、焼土粒 (粒径1～5mm)・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
11. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径1～10mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径3mm) 微量含む。新床面掘方覆土。
12. 褐色土 (7.5YR4/3) 締まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径1～5mm) 多量、炭化物 (粒径3mm)・炭 (粒径5mm) 微量含む。新床面掘方覆土。
13. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径5mm) 少量、炭化物 (粒径3mm) 微量、炭 (粒径5mm) 少量含む。旧床面掘方覆土。
14. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径1mm)・炭化物 (粒径2mm)・炭 (粒径5mm) 微量含む。旧床面掘方覆土。
15. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径10～20mm) 中量、焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。旧床面掘方覆土。
16. 灰褐色土 (7.5YR4/2) 締まり・粘性あり。焼土粒・炭化物・炭 (粒径1mm) 微量含む。旧床面掘方覆土。
17. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。焼土粒・BL (粒径1～10mm) 中量、炭化物 (粒径5mm) 微量、炭 (粒径2mm) 少量含む。旧床面掘方覆土。
18. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径5mm)・焼土粒 (粒径1～5mm) 微量含む。旧床面掘方覆土。

図10 S12

して両側には、約0.4mの間隔を置いて北側は塊状の切石が、南側は柱状の3本の切石が立てられているが、この間が竈燃焼部と考えられる。北側の切石塊の竈燃焼部側は被熱していた。袖部は左袖のみが確認された。袖部の先端の床面には焚口部に使用されていたと思われる直方体の切石 (長さ340mm、幅160mm、厚さ160mm) が認められた。この切石は上面に被熱の痕跡 (赤化) がみられた。小法は、長さ0.40m (残存値)、幅0.64mを測る。また、竈の前面の床面には焼土と炭化物粒の広がりが見られた。竈の覆土 (1～4層) は、砂岩粒を含む暗褐色土系の土である。なお、この竈は当初は南側に約0.5mずれていたと推測される。その根拠としては南側の柱状切石の直下に焼土範囲が認められ、これは移築前竈の火床面と思われる。また、柱状切石の構築土は、焼土粒を多量に含む土 (8・9層) であり、これは移築



SI2 竈 土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まりあり、粘性なし。砂岩粒 (粒径1~2mm) 少量、焼土粒・BL (粒径1~10mm) 中量、炭化物 (粒径1~3mm) 少量含む。
2. 褐色土 (7.5YR4/4) 縮まり弱い、粘性あり。砂岩粒 (粒径1~3mm) 少量、焼土粒 (粒径1~3mm) 微量含む。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 縮まり弱い、粘性あり。砂岩粒 (粒径1~3mm) 微量、焼土BL (粒径5~10mm) 少量、灰含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まりあり、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1~5mm) 少量、焼土粒・BL (粒径1~10mm) 微量含む。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径1~10mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1~3mm) 微量含む。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まりあり、粘性弱い。砂岩BL (粒径5~10mm) 中量、焼土粒 (粒径1~2mm) 少量、炭化物 (粒径1mm) 微量、灰含む。右内壁構築土。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 縮まりあり、粘性弱い。砂岩BL (粒径30mm) 少量、焼土粒 (粒径1~5mm) 中量、炭化物 (粒径1~2mm) 少量含む。右内壁構築土。
8. 暗褐色土 (10YR3/4) 縮まりあり、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1~5mm) 微量、焼土粒 (粒径1~3mm) 多量、炭化物 (粒径10mm) 少量含む。右内壁構築土。
9. 暗褐色土 (10YR3/4) 縮まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径3mm) 少量、焼土BL (粒径10mm) 多量、炭化物 (粒径10mm)・灰少量含む。掘り覆土。
10. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まり・粘性あり。砂岩粒 (粒径5mm) 少量、焼土粒 (粒径3mm) 微量含む。掘り覆土。

図11 SI2 竈

前竈の覆土や構築土を使用しているためと考えられる。

覆土 新床面の覆土が1~10層、新床面掘り覆土が11・12層、旧床面掘り覆土が13~18層と、3層に分けられる。新床面覆土は上下2層に大別され、上層 (1~3層) は灰黄褐色土で、下層 (4・5・8~10層) は、暗・黒褐色土系であるが、砂岩粒を少量以上含む土で、旧床面掘り覆土 (13~18層) では、焼土粒、炭化物粒を微量含む暗褐色土を主体とする。

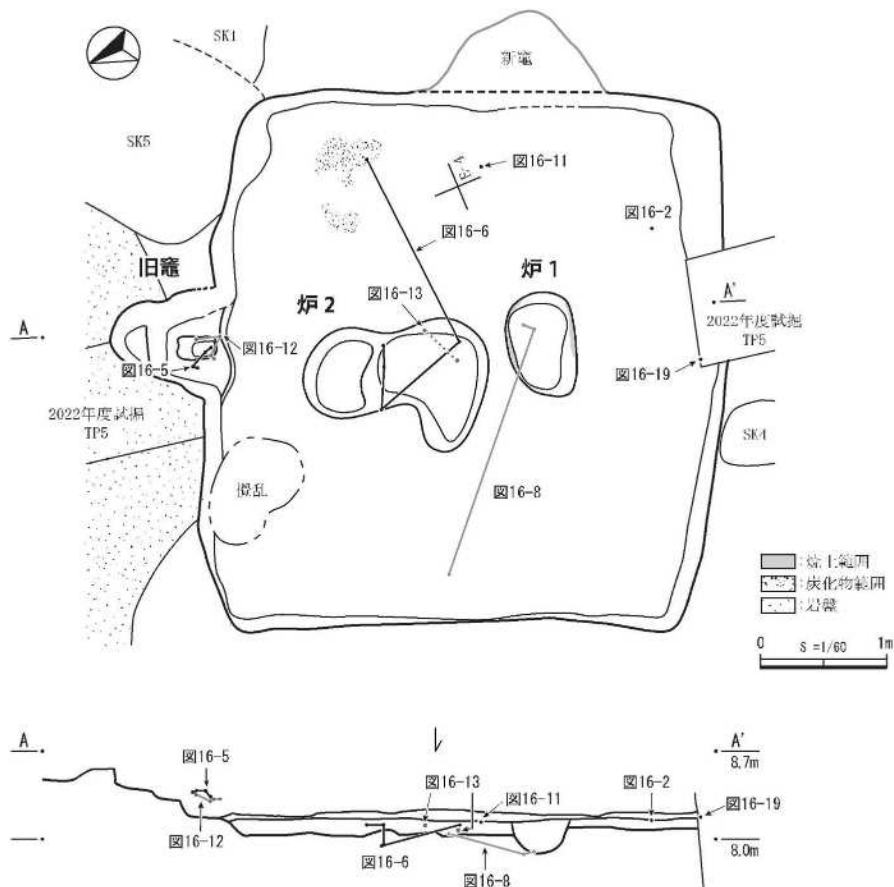


図 12 S12 旧床面

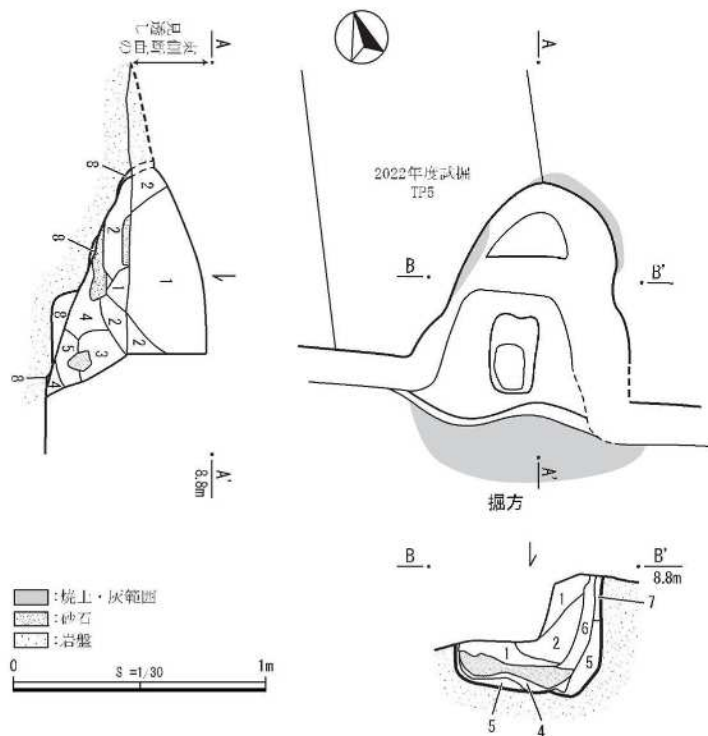
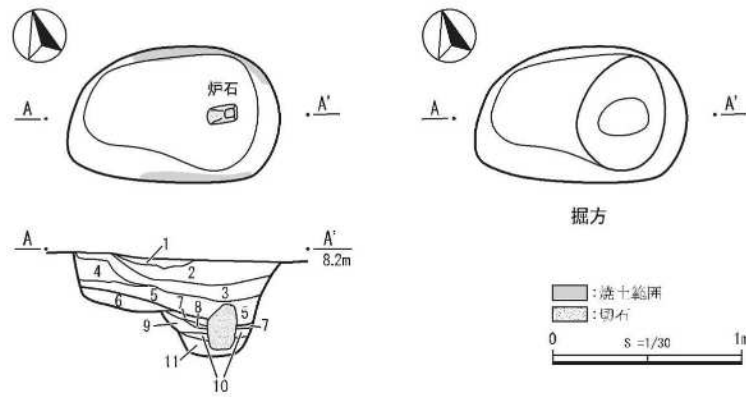


図 13 S12 旧竈

S12 旧竈 土層説明

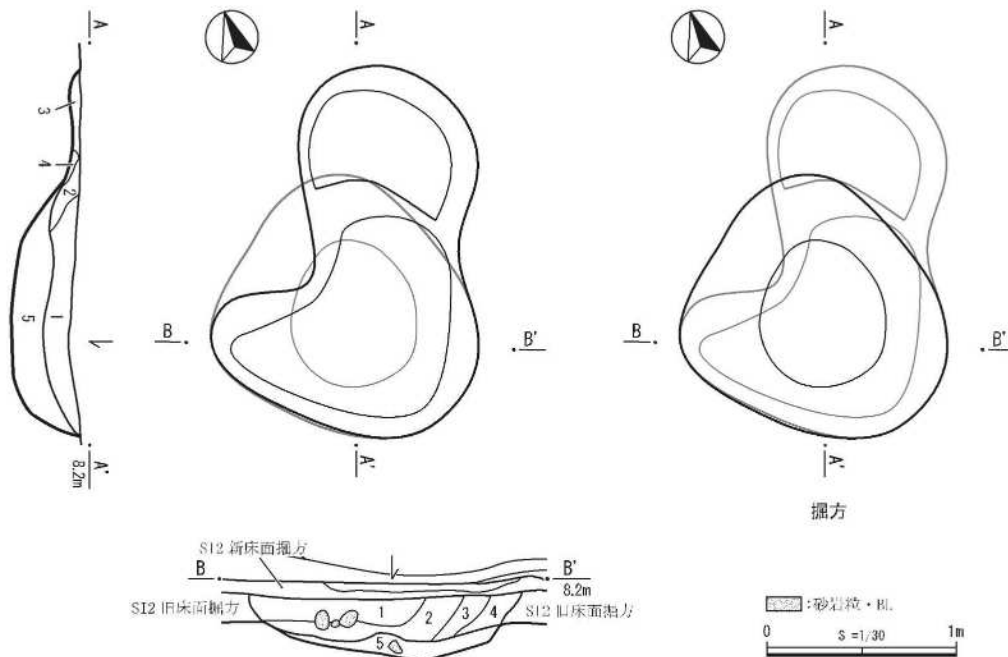
1. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性弱い。
焼土粒・炭化物 (粒径 1mm) 少量、灰 (粒径 1mm) 中量含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。
焼土粒 (粒径 1~3mm)・炭化物 (粒径 1~5mm) 少量、
灰 (粒径 2mm) 微量含む。
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まりやや強い、粘性弱い。
焼土粒 (粒径 3~5mm) 中量、炭化物 (粒径 2mm)・
灰 (粒径 2mm) 微量含む。
4. 黒褐色土 (10YR3/1) 締まりやや強い、粘性弱い。
焼土粒 (粒径 1~10mm) 多量、炭化物 (粒径 2mm) 少量、
灰 (粒径 1mm) 微量含む。
5. にぶい赤褐色土 (2.5YR4/3) 締まりやや強い、粘性あり。
焼土粒 (粒径 1~3mm) 多量、炭化物 (粒径 1mm) 微量、
灰 (粒径 1mm) 少量含む。
6. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりやや強い、粘性あり。
焼土粒 (粒径 1mm) 中量、炭化物・灰 (粒径 3mm) 微量含む。
7. にぶい黄褐色土 (10YR7/4) 岩盤崩落ブロック。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 20mm) 少量、焼土粒 (粒径 1~5mm) 多量、
炭化物 (粒径 3mm)・灰 (粒径 1mm) 微量含む。掘方要上。



SI2 炉 1 土層説明

1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 縮まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 1mm) 多量、炭化物 (粒径 5mm) 中量、灰 (粒径 1mm) 多量含む。灰と炭化物主体土。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 縮まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 2mm) 微量、焼土粒 (粒径 1~3mm) 中量、炭化物 (粒径 3mm)・灰 (粒径 1mm) 微量含む。下部赤化。
3. 褐灰色土 (10YR5/1) 縮まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 1~2mm) 中量、炭化物 (粒径 1mm) 少量、灰 (粒径 1mm) 中量含む。焼土主体土。灰混じり。
4. 褐灰色土 (10YR4/2) 縮まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1mm) 少量、焼土粒 (粒径 1~2mm) 中量含む。
5. 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 縮まり弱い、粘性あり。焼土粒 (粒径 1~3mm)・炭化物 (粒径 1mm) 微量含む。灰色粘土主体。
6. 赤灰色土 (2.5YR4/1) 縮まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 1mm) 中量含む。掘方覆土。
7. 褐灰色土 (10YR6/1) 縮まり弱い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 1~3mm) 中量含む。灰主体土。掘方覆土。
8. 黒色土 (10YR2/1) 縮まり弱い、粘性なし。炭化物が帯状に堆積する。掘方覆土。
9. 褐灰色土 (10YR4/1) 縮まりやや強い、粘性あり。砂岩粒 (粒径 1mm) 微量、焼土粒 (粒径 1~3mm) 多量含む。焼土と灰の混合土。掘方覆土。
10. 褐灰色土 (10YR4/1) 縮まりやや強い、粘性あり。焼土粒 (粒径 1mm) 少量、炭化物 (粒径 1mm) 微量含む。掘方覆土。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 縮まり中位、粘性あり。焼土粒 (粒径 1mm) 微量含む。掘方覆土。

図 14 SI2 炉 1



SI2 炉 2 土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まりやや強い、粘性弱い。砂岩 BL (粒径 5~10mm) 微量、焼土粒 (粒径 3~5mm)・炭化物 (粒径 5mm) 中量、灰 (粒径 5mm) 微量含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 縮まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 3~5mm) 多量、炭化物 (粒径 5mm) 中量、灰 (粒径 3mm) 微量含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 縮まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 5mm) 微量、炭化物 (粒径 5mm) 中量、灰 (粒径 3mm) 微量含む。
4. 黒褐色土 (10YR3/2) 縮まりやや強い、粘性弱い。焼土粒 (粒径 5mm) 中量、炭化物 (粒径 5mm) 多量、灰 (粒径 3mm) 微量含む。
5. 黒褐色土 (10YR3/1) 縮まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 5mm) 微量、焼土粒 (粒径 5mm) 中量、炭化物 (粒径 2mm) 少量、灰 (粒径 3mm) 微量含む。掘方覆土。

図 15 SI2 炉 2

いずれも締まりはやや強いが、粘性は弱い土である。なお、調査時には旧床面下を8～15cm掘削し、下層の砂岩ブロックが露出した所で掘削を止め、この間の上を掘方覆土とした。

旧床面 新床面の下に3～10cm盛土された(10・11層)下面が旧床面の使用面である。付属施設として旧竈、炉1・2が認められた。炉とした構築物は、覆土に焼土粒、炭化物粒、灰を多く含んでおり、同じ火を使用する施設としては竈とは異なる構造であることからこの名称とした。北東角に近い床面には炭化物の集中する範囲がみられたが、ここからは骨片(小片)が検出されている。

旧竈 掘方を完掘した。地山(岩盤)を平面形では逆U字形に掘り込んでいる。底面は煙道部に向けて小さな段を作りながら、緩やかに立ち上がる。壁や底面には工具痕が残っていた(巻頭図版1-4)。前面には焼土粒や灰の分布がみられた。また、煙道近くの壁(岩盤)も被熱して赤化している部分があった。規模は、長さ0.88m、幅0.92mを測る。覆土は上層(1～4層)と下層(5～7層)、最下層(8層)に大別される。上層(1～4層)は(天井部を構成していた土)、下層は上層の側面(燃焼部の壁を作っていた土)で、使用時の被熱をそのまま残している(7層は側面の岩盤が崩落した土)。8層は掘方を掘削した工具の中に入った構築土と考えられる。上下層に含まれる砂岩塊も竈構築土に使用されていたと思われる。

炉1 床面の中央南寄りに構築される。平面形は楕円形で、断面形は逆凸字形を呈す。炉石を埋め込むためと思われる掘方を伴う。規模は、長軸0.86m、短軸0.54m、深さ0.26m(掘方の最深0.39m)を測る。四周の壁の立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面は東側に向かって傾斜する。最深部に炉石(直方体)が立てられている。炉石は上部の7、8cmが出た状態で使用されていたと思われる。南北壁は最もよく焼けて焼土化していた(ガリガリに焼けた状態)(巻頭2-1左)。覆土(1～4層)は焼土粒が多く含まれ、1・3層には灰も多く含まれていた。最下層の5層は灰色粘土主体である(巻頭2-1右)。粘土層(5層)直下の底面もよく焼けていたことから、粘土を貼って再度使用した可能性がある。掘方覆土(6～11層)は、上層(6・7・9層)に焼土粒が中量含まれる。8層は炭化物粒の層である。掘方は底面の東端のみに存在し、炉石を設置するための掘り込みと思われる。

炉2 炉1の北側に位置する。平面形は、長楕円形で西南部が西側に突出する。断面形は楕形であるが、北側は皿状で浅いが、南半部は掘り込みが深く、掘方も存在する。規模は長さ1.49m、幅1.06m、深さ0.17m(掘方の深さ0.25m)を測る。覆土(1～4層)には、焼土、炭化物粒を多く含み、灰も混入する暗褐色土である。5層は掘方で焼土、炭化物粒、灰が混入するも量は上層より少ない。掘方は使用面の南半部にのみ存在し、平面形は円形で、断面形は皿状を呈す。

遺物出土状況 遺物は覆土中からは万遍なく出土しており、その量も4軒の竪穴の中で最も多い。掘方(新床面から旧床面まで)、旧床面、旧床面掘方からの出土は少なくなり、出方も散漫になる。接合関係は、旧竈内と旧床面とその施設間で認められた。図16-6の須恵器坏は、炉1掘方と炉2、旧床面で接合した。図16-8須恵器坏も炉1と旧床面の接合である。図16-5の須恵器坏と12の土師器台付甕は、旧竈内だけで接合しており、旧竈内の廃棄行為と考えられる。なお、図16-19の丸轆は建物南壁際の床面近くから検出されている。

出土遺物 覆土から土師器1,719点、須恵器181点、竈内から土師器194点、須恵器12点、石製品1点、金属製品2点、スコリア(延暦貞観)4点、掘方(新床面から旧床面まで)から土師器164点、須恵器7点、旧床面から土師器11点、須恵器2点、石製品1点、骨(骨片)3点、旧竈から土師器36点、須恵器20点、金属製品1点、焼成粘土塊2点、旧掘方から土師器356点、須恵器26点、土製品2点、スコリア(延暦貞観)1点、混入として縄文石器1点、弥生土器1点が出土した。

この内、図16に19点の実測図を掲載した。旧床面廃棄時のものは、5・6・8・11～13であるが、覆土中出土のものと比べても年代差は看取できない。1～3は土師器の相模型坏である。いずれも外面の体部下半には連続する横位の篋削りがみられる。器形をみても体部の斜めに立ち上がる角度もほぼ同じであり、同時期性が窺える。4はロクロ土師器坏であるが、体部は深めである。5～9は須恵器坏で、いずれも底部は回転糸切のままである。10はロクロ土師器の皿で、器壁はやや厚手、底部は回転糸切痕を残す。11～13・16は口縁部がコの字形に屈曲する甕で、12は内外が煤けている。14は口縁部がくの字に屈曲する甕の口縁部である。14は内外面が煤けている。15・17は相模型甕の口縁部と底部であ

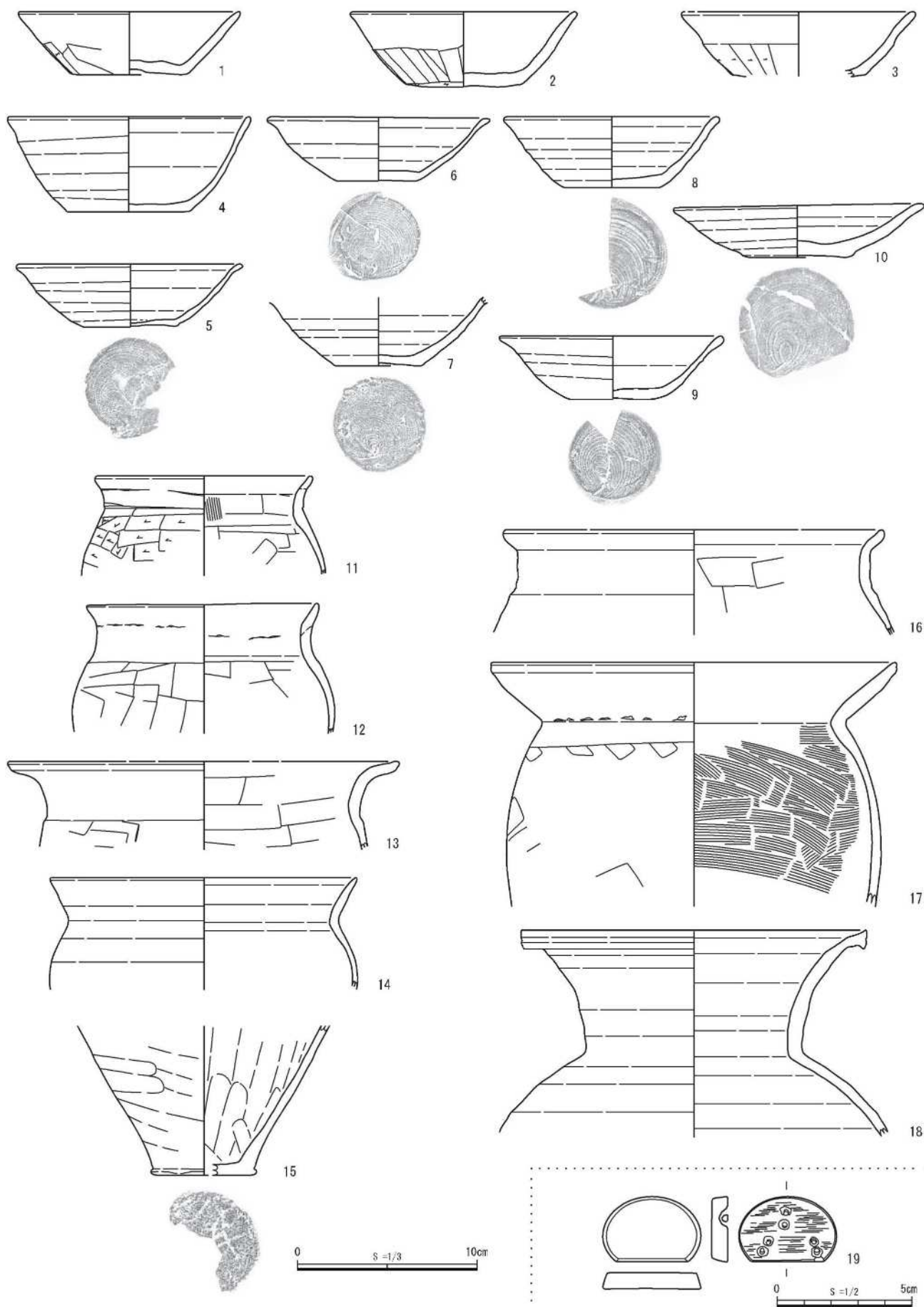


图 16 S12 出土遗物

表4 S12 土器観察表

〔注〕欄：値は復元値、残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法 (cm)	器形・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図16-1	土師器 壺 覆土	口径：復12.4 底径：復6.6 器高：3.5	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／調整：外面底部、中央は一定方向の、周囲は回転削り、中央は窪む。外面体部下半は横位の連続する窪削り、内面～外面口縁部は横撫で。／残存：1/3。	砂粒 良好 にぶい褐色7.5YR7/4	
図16-2	土師器 壺 覆土	口径：復12.6 底径：6.4 器高：4.2	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／調整：外面底部周囲は回るような窪削り、外面体部下半は横位の連続する窪削り、内面～外面口縁部は横撫で。／残存：3/4。	小礫、赤色粒 良好 褐色7.5YR6/6	器面荒れる。
図16-3	土師器 壺 覆土	口径：復13.0 底径：— 器高：残3.7	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／調整：外面体部下半は横位の連続する窪削り、内面～外面口縁部は横撫で。／残存：2/3。	小礫 良好 にぶい褐色7.5YR6/4	器面荒れる。
図16-4	ロクロ土師器 壺 覆土	口径：13.5 底径：6.8 器高：5.3	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する、体部は深め、／調整：外面底部回転削り、外面体部回転撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：3/4。	礫、小礫 良好 褐色7.5YR6/6	器面荒れる。
図16-5	須恵器 壺 旧蔵	口径：12.6 底径：5.2 器高：3.5	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／成形：ロクロ、底部回転削り（右）。／調整：外面体部下半ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：3/4。	小礫、白色粒 良好、焼き室み 黄灰色2.5Y6/1	
図16-6	須恵器 壺 炉1・炉2	口径：12.4 底径：4.5 器高：3.6	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／成形：ロクロ、底部回転削り（右）。／調整：外面体部下半ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：2/3。	小礫、黒色粒 良好 暗灰黄色2.5Y5/2	
図16-7	須恵器 壺 覆土	口径：— 底径：4.8 器高：残2.8	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／成形：ロクロ、底部回転削り（右）。／調整：外面体部下半ロクロ撫で、内面横撫で。／残存：1/2。	小礫、黒色粒 良好 暗灰色7.5YR6/1	
図16-8	須恵器 壺 炉1・口床面掘方	口径：復12.0 底径：復5.5 器高：4.0	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／成形：ロクロ、底部回転削り（右）。／調整：外面体部下半ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：1/2。	小礫、白色粒 良好 黄灰色2.5YR5/1	外面底部周囲荒れる。
図16-9	須恵器 壺 覆土	口径：12.5 底径：4.6 器高：3.5	器形：底部～体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。／成形：ロクロ、底部回転削り（右）。／調整：外面体部下半ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：1/2。	小礫 良好 暗灰色7.5YR5/1	
図16-10	ロクロ土師器 皿 覆土	口径：13.9 底径：6.0 器高：3.0	器形：体部は大きく開く。／成形：ロクロ、底部回転削り（右）。／調整：外面体部下半ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／残存：3/4。	小礫 良好 褐色5YR6/6	
図16-11	土師器 甕 口床面掘方	口径：復12.1 底径：— 器高：残5.4	器形：口縁部は逆コの字形に外反する。／調整：外面胴部横位の窪削りの後、内外面口縁部横撫で。／残存：口縁～肩部片。	砂粒 良好 褐色5YR6/6	
図16-12	土師器 台付甕 旧蔵	口径：13.0 底径：— 器高：残7.2	器形：口縁部は逆コの字形に外反する。／調整：外面胴部横位の窪削りの後、内外面口縁部横撫で。／残存：口縁～肩部片。	小礫 良好 暗褐色10YR3/4	内外面焼ける。
図16-13	土師器 甕 炉2	口径：復21.7 底径：— 器高：残4.9	器形：口縁部は逆コの字形に外反する。／調整：外面胴部横位の窪削りの後、内外面口縁部横撫で。／残存：口縁部片。	砂粒、雲母 良好 灰黄褐色10YR5/2	内外面焼ける。
図16-14	土師器 甕 覆土	口径：復17.0 底径：— 器高：残6.2	器形：口縁部はくの字形に外反する。／調整：外面胴部横位の窪削りの後、内外面口縁部横撫で。／残存：口縁～肩部片。	砂粒、雲母 良好 にぶい黄褐色10YR5/3	内面、外面体部焼ける。
図16-15	土師器 甕 覆土	口径：— 底径：復5.8 器高：残8.3	器形：底径の小さい底部から胴部は開きながら立ち上がり、底部は外側へ突出気味。／成形：底部は粘土板の上に胴部を貼付けて立ち上げる。／調整：内面胴部横位の窪で、外面胴部横位の窪で、外面底部木炭痕。／残存：底部1/2。	砂粒 良好 内面：にぶい黄褐色10YR5/3	内外面被熱し、外面炭付着。
図16-16	土師器 甕 覆土	口径：復21.2 底径：— 器高：残5.8	器形：口縁部は逆コの字形に外反する。／調整：外面胴部横位の窪削りの後、内外面口縁部横撫で。／残存：口縁～肩部片。	砂粒、雲母 良好 褐色5YR6/6	外面荒れる。
図16-17	土師器 甕 床面	口径：復22.0 底径：— 器高：残13.6	器形：口縁部はほぼ直角に外反し大きく開く、最大径は口縁部。／成形：口縁部は肩部上端に接合、接合部内面窪削り、外面指頭痕。／調整：内面胴部横位の刷毛目、外面胴部横位の窪で、内外面刷毛目による横撫で。／残存：口縁部～片部1/4。	砂粒 良好 にぶい黄褐色10YR6/4	
図16-18	須恵器 甕 覆土	口径：復19.2 底径：— 器高：残11.4	器形：頸部は長めで、口縁部はH字型に垂下する。／成形：ロクロ。／調整：内外面口縁部横撫で。／降灰：内面口縁部、外面肩部に自然積。／残存：口縁部片。	玉色粒、磁鉄 良好 褐灰色10YR5/1	

表5 S12 石製品観察表

番号	器種 出土場所	寸法 (cm)・重量 (g)				特徴・使用痕	材質	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
図16-19	石筭 敷土	2.4	3.7	0.6	11	丸筒、楕円形の長径方向に沿って切断した形。表面～側縁は研磨（光沢あり）。裏面は光沢無し。穿孔が2個ずつセットで3箇所（径2mm）。2個セットの穴はそれぞれが繋がる。完形。	結晶片岩 （黒色片岩）	

る。17の内面には横位の刷毛目がみられる。15は底部で、被熱の痕跡が顕著である。18は須恵器の甕で、内面口縁部と外面肩部に自然釉の降灰がみられる。19は石筭の丸軀であるが、黒色の結晶片岩を使い、表面と側面は丁寧に磨かれている。裏面には2個セットの中で繋がった穴が3箇所に開けられている。この他、支脚と炉1の炉石の写真を掲載した（図版16-1）。支脚（図版16-1-写5）は、上部が欠損するが、砂岩製の切石の側面を面取りしており、下端は平らである。上部は被熱で赤化している。上部寸法は長さ22cm（残存値）、幅10.5cm、厚さ7.5cmを測る。炉1の炉石は（図版16-1-写6）、全体の形は直方体で、上部に向けて短辺の1面の上半部が斜めに削られている。上半部は被熱で黒ずんでいる。これらの遺物の年代は、須恵器壺の底径口径比（1：2）、ロクロ土師器壺（相模型壺）の同時期の須恵器壺を模倣した器形、またロクロ土師器皿の存在、土師器甕（相模型甕）や口縁部コの字形の土師器甕がみられること、さらに旧掘方と覆土から延暦貞観スコリアが検出されていることを加味すると、9世紀後半と考えられる。

遺構の時期 出土遺物（土師器、須恵器）の様相から、9世紀後半に廃棄されたと推定する。

SI3

位置・切合い 調査区北部C・D-3にまたがって位置する。SK2に切られ、SK6に切られる。地山（岩盤）からⅢ層に移行する際に構築されている。南半部から西部にかけては削平されて欠失しており、北半部の覆土の残りも良くない。

形態・規模 北壁はほぼ残るが、壁は北東角までしか残存しない。床面は北半部を残すのみである。規模は残存値で東西4.10m、南北2.30m。深さは最深で0.13mを測る。主軸方位はN-5°-Eである。床面はほぼ平坦で、竈は北壁のやや東寄りに位置する。周溝、柱穴はなく、硬化面もなかった。竈前方の床面上に焼土範囲（0.55×0.50m）が認められた。規模は東西4.10m、南北2.30m。深さは最深で0.13mを測る。主軸方位はN-5°-Eである。

覆土 残存状況が悪くうすくⅠ層が残るのみである。砂岩粒と炭化物を少量含む暗褐色土である。

竈 壁を北側に掘り込んでいるが、両袖は欠失している。竈の幅の中間に切石製の支脚が置かれていた。支脚は長さが8cmしかなく、上部は削平されていると考えられる。試掘時のTP5拡張西②の北壁に竈の東西断面がかかっており、支脚と東西両壁が観察されている（図版6-6）。試掘の報告によれば、この部分の幅は0.4mで、支脚は既に上部が欠損している。竈の覆土は、締まりはやや強く、粘性は弱い、砂岩粒・ブロックが少量含まれる褐色系の上が主体となっている。

遺物出土状況 覆土があまり残存していなかったこともあり、遺物は破片が散在していた。

出土遺物 土師器56点、須恵器転用砥石1点の他に、縄文土器1点、弥生土器2点が出上した。実測図を掲載したのは、床面から出土した図19-1須恵器転用砥石である。須恵器の甕の胴部の破片を利用して割れ口の1面を砥面としての使用面が認められる。支脚の写真を図版16-1-写3に掲載した。下部しか残存しないが（長さ8.2cm、幅12.2cm、厚さ9.5cm）、側面は面取りはされている。

遺構の時期 遺構の遺存状況も悪く、出土遺物も少ないため、時期決定が難しいが、竈の構造はSI1、SI2に類似していることから、これらの竪穴と同時期と考えておく。

SI4

位置・切合い 調査区西壁際にかかるB・C-3・4区に位置する。西側は調査区外に延びる。表土直下が検出面である。

形態・規模 平面形は残存部では南北に長い長方形を呈する。規模は南北4.23m、東西3.10m（2023年度試掘調査TP5で西壁を確認）、深さ0.40mを測る。長軸方向はN-26°-Eを測る。床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。周溝はない。顕著な硬化面もなかった。

覆土 砂岩粒を少量含む暗褐色、黒褐色系の土が主体を占める。床下のほぼ全面に掘方がみられる。竪穴の中央部が最も深く、厚さ0.40mを測るが、南北方向は薄くなっている。ただこの掘方は、東側に位置するSD1の西側の延長のようにも捉えられる。

遺物出土状況 南半部より北半部が多い。全体をみると、点数は多いが、破片が多い。接合例は、床面と床面の1例、床面と掘方で1例が認められた。

出土遺物 覆土（床面含む）から土師器487点、須恵器27点の他に弥生土器10点が出上し、掘方からは土師器52点、混入として弥生土器1点が出土している。この内4点の実測図を図21に提示した。いずれも土師器で、覆土中からの検出である。1は、口縁部が緩いくの字形に湾曲する坏である。2・3は体部が直線的に開く底径の大きい坏である。4は甕の底部が残存するもので、外面の底部には木葉痕が残っている。これらの遺物の年代は、坏が丸底のものや底径が大きく、口径との比率が小さいタイプであることから、8世紀と考える。

遺構の時期 出土遺物の様相から8世紀と推定される。

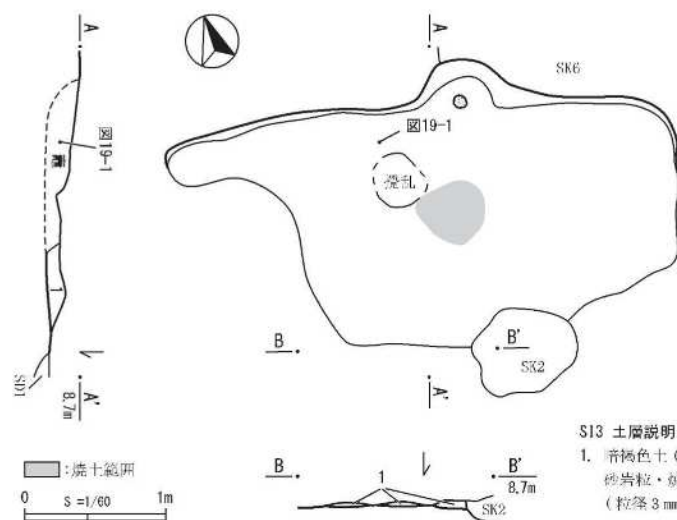
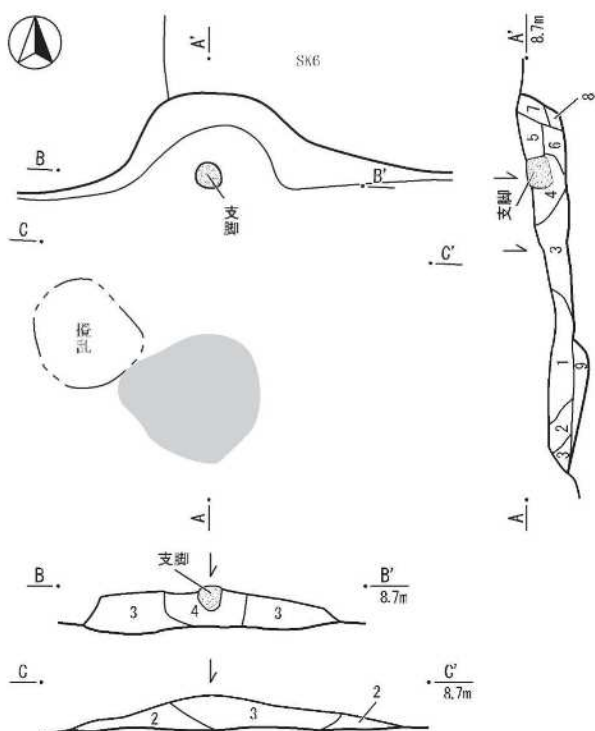


図17 S13

S13 土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりやや強い、粘性弱い。
砂岩粒・焼土粒 (粒径 1 ~ 10 mm) 少量、炭化物 (粒径 3 mm) 微量含む。



S13 竈土層説明

1. 明褐色土 (7.5YR5/8) 締まりやや強い、粘性なし。
砂岩粒 (粒径 1 ~ 3 mm) 微量含む。焼土主体土。
2. 暗褐色土 (10YR3/5) 締まりやや強い、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 1 mm) 少量、焼土粒 (粒径 1 ~ 20 mm) 中量含む。
3. 褐色土 (7.5YR4/3) 締まりやや強い、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 1 mm) 少量、焼土粒 (粒径 1 ~ 3 mm) 中量、炭化物 (粒径 1 ~ 5 mm) 微量含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 1 mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径 1 ~ 10 mm) 微量、灰色土丹粒 (粒径 1 ~ 2 mm) 少量含む。
5. 褐色土 (10YR4/4) 締まりやや強い、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 1 mm)・焼土粒 (粒径 1 ~ 3 mm) 少量、炭化物 (粒径 1 mm) 微量含む。
6. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりあり、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 1 ~ 2 mm)・焼土粒 (粒径 1 mm) 少量含む。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まり強い、粘性弱い。
砂岩粒・BL (粒径 1 ~ 10 mm)・焼土粒 (粒径 1 mm) 少量、炭化物 (粒径 1 mm) 微量含む。
8. 褐色土 (10YR4/4) 締まり・粘性あり。
焼土粒・炭化物 (粒径 1 mm) 微量、砂岩 BL (粒径 30 mm) 多量含む。
9. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。
砂岩粒 (粒径 1 mm)・焼土粒 (粒径 1 ~ 5 mm) 少量、炭化物 (粒径 1 mm) 微量、岩盤用 (粒径 30 mm) 含む。

図18 S13 竈

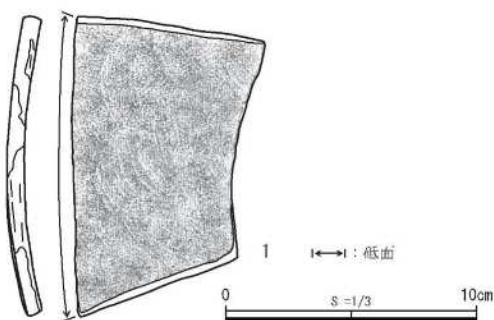
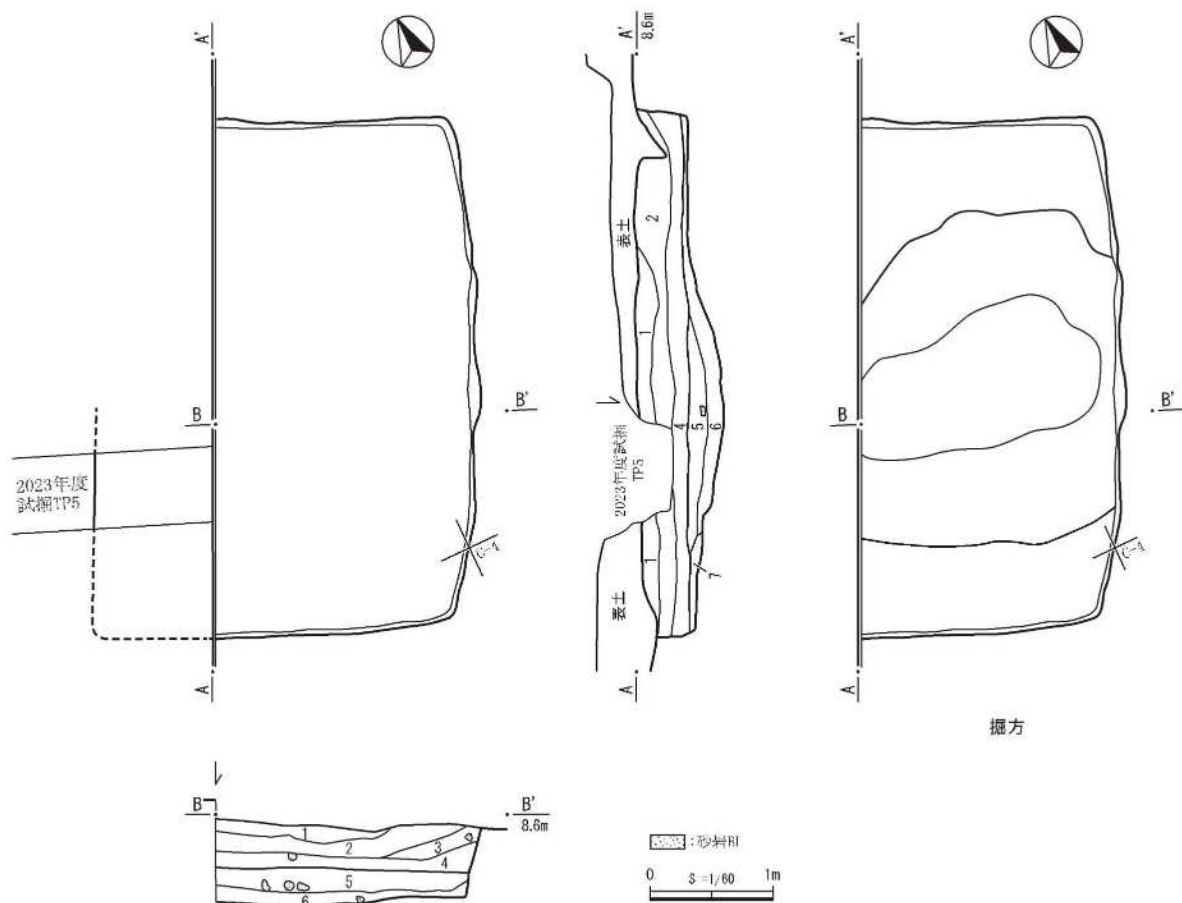


図19 S13 出土遺物

表6 S13 転用石製品観察表

番号	器種 出土場所	寸法 (cm)・重量 (g)				特徴・使用痕	胎土 焼成	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
図19-1	転用紙石 床面	12.6	7.6	0.7	82	須恵器の裏の脚部の破片を転用。紙面は側縁の割れ目1面を使用。	胎土：白色細粒 焼成：良好	



S14 土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり、粘性弱い。砂岩粒・BL(粒径1～10mm)少量、炭化物(粒径1mm)微量含む。
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 締まり・粘性あり。砂岩粒少量、焼土粒・炭化物(粒径1mm)微量含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～3mm)・焼土粒(粒径1～3mm)・炭化物(粒径1mm)微量含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒(粒径1～2mm)少量、焼土粒(粒径1mm)・炭化物(粒径2mm)微量、砂岩BL(粒径100mm)少量含む。
5. 暗褐色土 (10YR2/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩質土少量、焼土粒(粒径1～5mm)・炭(粒径5mm)微量含む。掘方覆土。
6. 黒褐色土 (10YR3/1) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩BL少量、焼土粒(粒径1～3mm)微量含む。掘方覆土。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒少量、焼土粒(粒径1～3mm)微量、砂岩BL(粒径100mm)含む。掘方覆土。

図 20 S14

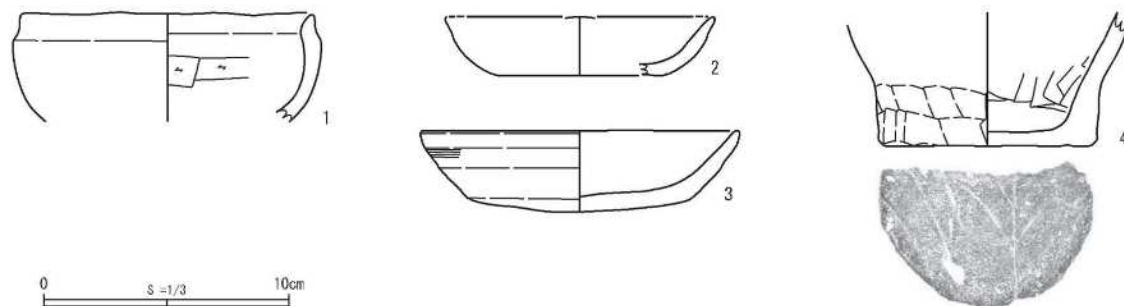


図 21 S14 出土遺物

表7 SI4 土器観察表

寸法欄：復は復元値，残は残存値を大わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法 (cm)	器形・制轡・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図21-1	土師器 坏 覆土	口径：復12.0 底径：— 器高：残 4.4	器形：体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は緩いくの字形に外反する。／調整：外面体部模位の整削り、内面～外面口縁部模撫で。／残存：口縁～体部1/4。	砂粒 良 褐色2.5YR6/8	内面口縁部荒れる。
図21-2	土師器 坏 覆土	口径：復11.0 底径：復 7.0 器高： 2.4	器形：平らで大きな底径の底部から体部は開きながら立ち上がる。体部の立ち上がりは低い。／残存：1/4。	小砂 良 褐色5YR7/6	内外面器面荒れる。
図21-3	土師器 坏 覆土	口径：復13.0 底径： 9.0 器高： 3.3	器形：平らで大きな底径の底部から体部は開きながら立ち上がる。／調整：外面口縁部は強い模撫で、他の部分は器面荒れており観察不能。／残存：1/3。	小砂 良 にぶい褐色7.5YR7/4	内外面器面荒れる。
図21-4	土師器 焼 覆土	口径：— 底径：復 8.4 器高：残 5.4	器形：胴部の立ち上がりは底径部は垂直で、上方は開き気味に立ち上がる。／成形：底部粘土板に胴部は接合、外面底部木炭痕。／調整：器面荒れるが、外面体部の底部隙には連続する指頭痕がみられる。／残存：底部1/2。	砂粒 良 内面：暗灰黄色2.5Y4/2	内外面器面荒れる。 被熱

2. 土坑

SK2

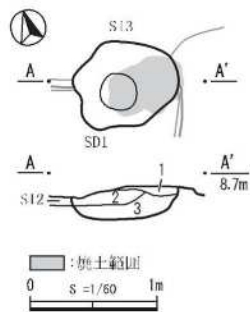
調査区の北部C・D-3区に位置する。SI3とSD1を切る。平面形は楕円形、断面形は碗形を呈する土坑である。底面は平坦で、底面から壁の立ち上がり際は緩やかだが、壁は急に立ち上がる。規模は長さ0.80m、幅0.70m、深さ0.25mを測る。覆土は3層に分層される。確認面では焼土が散在していたものの（1層）、厚さは薄く、壁や底面には被熱の痕跡はない。出土遺物は、近代の陶器が1点（破片）出土した。切り合い関係からみれば、出土遺物は混入ではなく、遺構廃絶時期を反映している可能性がある。

SK4

調査区の北部D-4区に位置する。令和5(2023)年の試掘坑TP5に南端を切られ、欠失する。平面形は長方形と推定され、断面形は碗形を呈する土坑である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長さ0.63m（残存値）、幅0.50m、深さ0.08mを測る。覆土は暗褐色土1層である。出土遺物は、縄文土器2点、土師器6点、須恵器4点の計12点が出土した。この内須恵器2点の実測図を掲載した（図24）。図24-1は須恵器の坏で、底部は回転糸切痕を残す。体部上半より上を欠損する。2は須恵器の長頸瓶で、口縁部を欠損する。

SK5

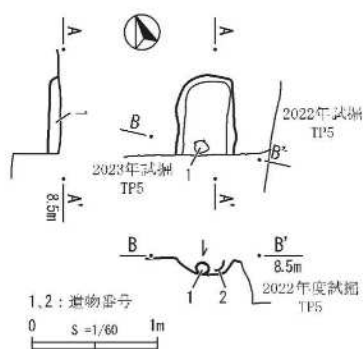
調査区北部E-3区に位置する。SI2とSK1を切る。平面形は不整な楕円形、断面形は箱形を呈する土坑であるが、深さが深い。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長さ1.90m、幅1.47m（残存値）、深さ0.96mを測る。覆土は8層に分層される。最上層には焼土が散在していたが、厚みは5cmもない（1層）。その下層の2層以下には砂岩粒・ブロックが一定量含まれる暗褐色土や黒褐色土である。出土遺物は縄文土器が1点出土した。縄文土器は混入であるが、この1点は図32-8に実測図を掲載した。



土層説明

1. 褐色土 (7.5YR4/4) 締まりやや強い、粘性中位。砂岩粒 (粒径3mm) 微量、焼土粒・BL (粒径1~30mm) 多量、炭化物 (粒径3mm) 微量含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1~3mm) 中量、焼土粒・BL (粒径1~10mm) 少量、炭化物 (粒径1~5mm) 微量含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1mm)・焼土粒・BL (粒径1~10mm) 微量含む。

図22 SK2



土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1~5mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。

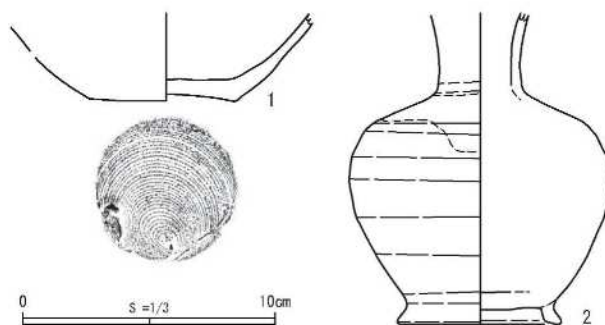


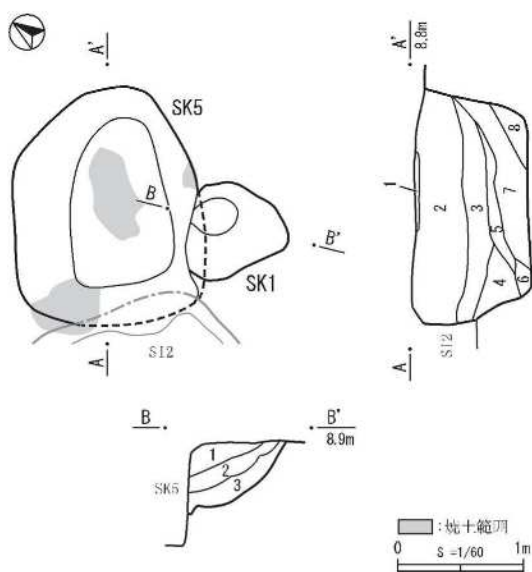
図23 SK4

図24 SK4出土遺物

表8 SK4 土器観察表

寸法欄：残は残存値を表す。

番号	材質・器種 出土場所	寸法 (cm)	器形・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図 24-1	須恵器 坏 覆土	口径：— 底径：6.0 器高：残 3.5	器形：底部～体部は開きながら立ち上がる。／成形：ロクロ、底部回転糸割 (右)。／調整：内面～外面体部ロクロ磨で。／残存：1/2。	小礫 良好 灰色 5Y5/1	
図 24-2	灰釉陶器 小壺 覆土	口径：— 底径：6.5 器高：残12.3	器形：高台は外傾し、胴部は上位に最大径がある。頸部は細く、開きか減。／成形：ロクロ、付高台。／調整：高台周囲は磨で付け、外面胴部中・下位は横位の削り、外面胴部上位～頸部磨で。／残存：9/10。	小礫、白色粒 良好、自然釉降灰 暗灰黄色 2.5Y5/2	



SK1 土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1~5mm) 中量、焼土粒・炭化物 (粒径1~3mm) 微量含む。
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径1~20mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1~3mm) 微量含む。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径1~5mm)、焼土粒・BL (粒径1~10mm) 少量、炭化物 (粒径1mm) 微量含む。

SK5 土層説明

1. 褐色土 (7.5YR4/6) 締まりやや強い、粘性弱い。焼土層上体上。砂岩粒 (粒径1mm) 中量、炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりやや強い、粘性なし。砂岩粒・BL (粒径1~10mm) 中量、焼土粒 (粒径1~5mm) 少量、炭化物 (粒径1mm)・灰色スコリア (粒径2mm) 微量含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりやや強い、粘性弱い。砂岩粒・焼土粒 (粒径1~5mm) 少量、炭化物 (粒径1mm)・灰色スコリア (粒径2mm) 微量含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり、粘性弱い。焼土粒 (粒径1mm) 中量、炭化物 (粒径1mm) 少量含む。
5. 褐色土 (10YR4/4) 締まりやや強い、粘性あり。砂岩粒 (粒径1mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1mm)・礫 (粒径10mm) 微量含む。
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 締まりあり、粘性弱い。焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
7. 褐色土 (10YR4/4) 締まりやや強い、粘性あり。砂岩粒 (粒径1~20mm) 少量、焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。
8. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まりあり、粘性弱い。砂質。砂岩 BL (粒径20mm)・焼土粒・炭化物 (粒径1mm) 微量含む。

図25 SK1、SK5

3. 包含層の落込み

本遺跡では、現場調査時には遺構として調査したが、整理作業で検討した結果、包含層（遺物、焼土、炭化物などを含む）を掘削したと判断した。ここでは名称を「包含層の落込み」とし、その観察は遺構と同様に記載して、最後に所見の項目を追記して包含層とした根拠を示した。なお、出土遺物で実測図を掲載したものは、第3節下層調査に記載した。

SD1

調査区中央のC・D-3区に位置する。東端は検出したが、西端はSI4に、現場調査時点断ち切られている。東西方向に長軸方向をもつ溝状の落込みである。幅は南壁に凸凹がみられ、一定しない。北壁はほぼ直線状である。

断面形は北壁側の立ち上がり角度が緩いV字形を呈す。南壁の立ち上がりは急で、底面からの立ち上がり際の角度は鋭角である。底面は北壁側に向かって緩い角度で上がっていき、北壁もその延長で、緩い角度で立ち上がる。規模は、長さ5.55m、幅1.70m、深さ0.52mを測る。覆土の上層（1・2層）は、砂岩粒・ブロックを多く含む土で、下層（3～5層）は、砂岩粒は少ない。出土遺物は土師器が6点である。

所見：断面形が通例の溝は相違する。上層断面をみると、掘り込み層と覆土の違いが明確にならない（巻頭図版2-2）。これは特に南半部に顕著である。平面をみれば西側のSI4掘方に繋がる可能性がある。標高をみるとSD1は最深7.9m、SI4掘方の最深は7.8～7.9mでほぼ同じである。底面の傾斜が北に浅く、南に深くなるのは、Ⅲ層の傾斜方向と同じである。上記のような混入物を含むⅢ層を掘削したということになる。

SK1

調査区東寄りのE-3区に位置する。土坑状で、平面形は不整形で、断面形は碗形と推定する。規模は残存値で長さ0.80m、幅0.76m、深さ0.60mを測る。底面から壁は湾曲しながら立ち上がる。覆土は砂岩粒、焼土粒、炭化物を中量から微量含む土である。

所見：平面形から確認されたのではなく、SK5掘削中の壁面で確認された。壁面構成土とは相違する土が検出されたことから遺構と判断し、Ⅲを掘削したということになる。出土遺物は土師器22点、須恵器3点である。

SK3

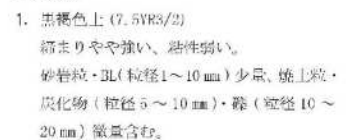
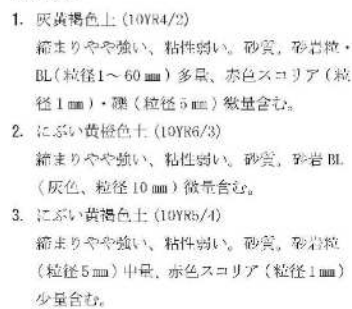
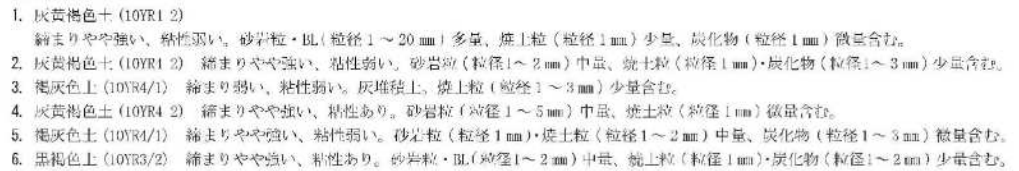
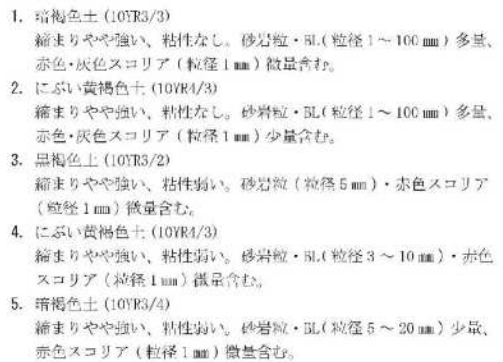
調査区北寄りのD-3区に位置する。土坑状で、平面形は楕円形、断面形は碗形と呈する。底面近くには小さな稜を有する。壁の立ち上がりは急である。覆土は全体的に砂粒を多く含み、焼土粒、炭化物粒、あるいは灰が少量含まれる。規模は長さ1.04m、幅0.66m、深さ0.58mを測る。

所見：当初平面形は確認されなかった。SI2の西壁で焼土がみられたために周囲の焼土や炭化物のみられる範囲を掘削したもので、混入物の範囲を掘削したということになる。出土遺物はスコリア（延暦貞観）1点である。

SK6

調査区北寄りのD-3区に位置する。土坑状で、平面形は長方形で、断面形は箱形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、ところどころ掘り込み層の砂岩ブロックが突出している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は、長さ2.10m、幅0.95m（残存値）、深さ0.24mを測る。覆土は全1～3層が、砂質で、砂岩粒・ブロックを多く含んでいる。出土遺物はない。

所見：当初、地山（岩盤）を掘り込んで北壁のプランが検出されたために掘削したが、土層断面の観察によれば、下層の覆土は掘り込み層に続いている（巻頭図版2-3）。底面にも掘り込み層に含まれる砂岩ブロックの上部が突出していることから（図版8-6）、Ⅲ層の堆積層を掘削してしまったということになる。



SK7

調査区北寄りのD-3・4区に位置する。上坑状で、平面形は長方形か正方形と思われ、断面形は楕形と推定する。規模はいずれも残存値で、長さ2.90m、幅0.35m、深さ0.40mを測る。覆土は砂岩粒・ブロックを少量、焼土粒、炭化物をわずかに含む土である。出土遺物は土師器34点、石製品2点の他に縄文土器1点である。このうち石製品（火打石）を図版16-1-写2に掲載した。

所見：経過としてはSI2の西壁に焼土、炭化物がみられ、その後平面形の確定に入った。この焼土や炭化物を含む土の範囲を遺構と捉えてしまったということになる。

溝

調査区南端のA～C-5・6、D-6区に位置する。表土直下で確認された。壁が検出されたのは北壁のみで、南側と東西側は調査区外へ延びる。平面形は溝状である。規模は残存値で長さ17.30m、幅6.70m、深さ0.90mを測る。

所見：当初はI-1～4層がグライ化していたために、溝と判断して掘削した。宝永スコリアが検出されたI-4層を溝の底面と判断して、掘削を終了したものの、覆土中には滞水や流水の痕跡がみられなかった。東壁土層断面の検討からは、調査区南半部には表土の下に北側からI-5・6層を北端とする厚さ約1mの盛土がされており、溝とした範囲はこの盛土の最も新しい層（I-1～4層）に該当する。I-4層底面に堆積していた宝永スコリアも塊が散在するもので、降下当初の原位置は保っていない可能性が高い。調査当初溝状のグライ化は水位の関係と考えられる。また、この溝の北壁際の底面を中心に多数の丸杭が不規則に打設されていたが、杭の上部は残存していなかった（図6）。また、3本組でコンクリート製の杭が打設されており（図6）、これは調査区東壁土層断面でみると、表土直下から周囲に約1mの掘り込みを伴っていることから、近代以降の擾乱の範囲が広がっていた可能性がある。

出土遺物は、掘削した範囲内（溝内）の土は一括で取り上げている。材質ごとでは、土師器29点、須恵器6点、骨2点、中世の陶器15点・土器2点、近世の磁器6点・陶器7点・土器4点、近代の磁器6点・陶器3点が出土した。これらの遺物は層位からみれば、I-1～4層から出土していることから、この層の年代は遺物の下限である近代となる。このうち中世の遺物5点を実測し（図35-1～5）、4点を写真掲載（図版15-1-写1～写4）、近世・近代の遺物を6点写真掲載（図版15-2-写1～写6）した。個別の出土遺物の説明は第3節2. c・dに記載した。

以上が現場調査時点では遺構と考えられていた溝と土坑である。検出場所からみれば、SD1、SK6は、地山（岩盤）が表土直下で露出している場所に近い場所にあり、SD1の短軸の土層断面をみれば、北から南へと底面は傾斜していて、これはII層の傾斜方向とほぼ一致している。SK6も地山（岩盤）際が検出面であるが、この部分だけ違う土が堆積していたと考えられる。東壁土層断面の観察からは、III-1～4層までの層は、南側に傾斜しており、なおかつ土層も細分されている（図4・5）。III-1～4層までは焼土や炭化物は含まれないが、上記のSK3、SK5・SK7では焼土、炭化物の有無が遺構として確認される指標となっていることから、このあたりに展開する包含層（III層）にはそれらが（土師器、須恵器なども）含まれていたために誤認したものである。

第3節 下層調査

検出されたのは、土坑1基と包含層である。包含層出土の遺物は、時代ごとに大別し、層位別の破片の数量を呈示した。

1. 土坑

SK8

調査区東壁際のD-5区に位置する。確認面はII-6層である。重機で掘削中に、骨が出土したことにより確認された。

